
Lucky staR ~俺の人生を変えた物語~

太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lucky stars／俺の人生を変えた物語

【Z-IPアード】

Z00600

【作者名】

太陽

【あらすじ】

柏木ひろ。彼は高校一年生。

オタクである。

彼はもともとオタクではなかつたがとあるアニメのOPがオリコン入りしているのをみて目から鱗。

それから彼は色々な経験を経て立派なオタクに成長してしまった。

そして今日もいつものように秋葉原へ…
しかし何か騒がしい。

彼はそこで人生を変える出来事に出会うことになるのである…

プロローグ（前書き）

はじめまして 杉 樹です！初心者です…
これを読んで下さると幸いです！どうかよろしくお願いしますね！
(^ー。^)

プロローグ

警察官になりたかった

理由はわからない

小さかつた時そう思つていたんだ

あの青い帽子と制服、トランシーバーがかっこよかつたかもしれない

たぶんなんとなく

でも今はしつかりした理由がある

大好きな町を守りたい

大好きな風景を守りたい

そして大好き、と言う言葉はおかしいかな…「大切な人」をこの手で守りたい

そう決めたのはいつだつただろうか…

今日もいい天氣だ…

久しぶりに行つてみるか…

全てが始つたあの場所へ…

全ての始まり

「オタク」

と書いた言葉の定義について考えてみた。

萌えアニメや萌えマンガを読んでばかりいる人？

部屋にフィギュアがある人？

秋葉原に通ってる人？

ふん…くだらない…

「全部~~近~~ではまつちよるわああああああああ…」

俺は柏木ひろ。 しがない高校生。

オタクである。いや、元々オタクじゃなかつたんだけどなあ…

2年前かな…あるアニメのOPがオリコン入りしているのみで目から鱗状態よ、、

あれをみた時俺の人生ガラツと変わったね！

今では棚にはフィギュア、壁にはポスター、こりゃ完全にきりやつてるわ…

「46…ハアハア…47…ぐつ…もうダメだ…ハアハア…いや、ま

別に良からぬ」としたわけじゃないよ！？

特製竹刀での股割り（自称地獄素振り）が終わり、俺の今日の筋トレは終了した…

オタクでも男の本分である筋トレ（そりなのかな…？）は忘れてはいけん！

どんなに辛く苦しい筋トレでも俺は「萌え」を「エネルギー」変え
乗り越えてきた！

故に今愛娘から流れている素晴らしい音色は無論—アーヴィングである
！！

「さてと筋トレ終わつたし、ネトゲでもするか！」

さっそくソフトを入れ、起動する。最近始めたばかりのまだレベルが低いのだが仲間になつてくれた人たちもいい人ばかりだから楽しくやっている。

「おっ！みんなもういるな…ちょっと遅かったかな？」
時計を見る。集合時間少し過ぎてるな…

ヒーロ「遅れヒーロー」めん(^__^)」

konakona 「全然OK(^ω^)じゃ揃つたし行こっか！」

D・J 「OK! まず手始めに～」

Hi「Oはまあ、俺の名前ね。俺実はオタクつてもそんなに業界用語とかわかんないのね。だからたまにおいてけぼりくらうわ…

だが始まつたからには本氣をださねばー

さてと、まだまだ夜はながい…

いくか…!

いつもして夜は更けていく…

東京にある俺が行つてる高校はあまり頭はいい方ではないかな…

まあそこそこだと思つ

「眠い…」

これはヤバいな… 眠すぎる… 昨日やつぱりやり過ぎたんだ

いつもは2時に落ちるのだが調子にのつて4時までやつてしまつた…

おかげで「ンタクトもつけてないよ…
授業どうすつかな…

「オッス柏木…」

バシンと背中を叩かれる。

いい眠気覚ました かなりの力で叩きやがったな…

「つ…おはよう…山川…目が覚めるおもいだつたよ」

俺は背中をさすりながら言つ

彼はもう一度オッスと言つと席に戻つていった

友達はあまり多いほうではないが俺は元剣道部なので現剣道部の彼とはコネがあった

先生が入ってきた

「おはよう諸君らー…おい柏木シャキつとせんかシャキつとー…ゴーヒー飲むか?メガシャキーあははは!」

教室に先生の笑い声のみが響く

俺が滑つたみたいで恥ずかしい…

それよりもっと大きな問題がある…メガシャキつてゴーヒーだったつけ…?

昼休み

「オーッス!」

僕は別のクラスにいたみんなで集まつて食べる

「おつかれ」

「うううー。」

じゅんじゅんちやんがあいわつをしかえしてぐる
二人は俺の友達で俺達三人はいつも一緒に弁当を食べる「今日も寒
いなー」

「もうでもねえよ」

「あつやつやつ、昨日のテレビ見たー?」

普通すぎる会話。

なのでちゅうとおもしろくしてみよひじ試みる

「人一倍つて言ひたけど實際一倍してもなんも変わらんよな

「お前よくやんなくだらん」と思つくな

「あははー確かにそうだねー変わつてないなー」

まあこんなもんで勘弁

その時ちゅうと思つだした

「あー、そだー今日ちゅうとアキバ付き合つてくんね?」

つと二人を誘つてみる。好きなマンガの新刊が出るから行こうと思つていたのだ

じゅんは鋭く「またか！？お前金もねえのによくいくな」昨日も一緒にいつたじゅん」と俺が金がないのを知つていてそう言つ

あひなちゃんは「うん、今日バイトなんだ。すまんなー」ふられると

「そか、じゃねじかんせ...?」

「俺もバスだな。今日は塾あるんだよ」

「オウマイグッズネス、ヒズオングラウンジー。どうしてもだめ？
たのむよ～」あまりの残念さに訳の解らん言葉を発してしまった

じゅんじゅんせはつ「今日はマジで駄馬」「ふりたる

俺は落ち込んだ素振りをみせる「そつか、そりだよな……わがままい
つて」「めん

するとじゅんは「……わかつたよ金貸してやるよー。まあ、さうんとかえせよー? 仕方ねえなー」お金貸してくれた

俺はろくな死に方をしないだろ？ そう断言出来るワンシーンだった

いや、別にお金欲しさでやう言つた訳じやないんだけどね

「ありがとうおおお！じゅん最高！大好き！じゅんは俺の嫁！」

「気持ち悪いこと言つないで！」

俺たちのノリはこつもこんな感じだ

俺はオタク、じゅんは常識人、せつちゃんはまあマイペースかな?
そんな感じでなかよくやつてる

実は二人とも部活やつてたんだよなあ

俺は剣道部、じゅんは野球部、せつちゃんはサッカー部。

「の三つは」の学校の「三大キツイ部活」と呼ばれるほどさつきつかったのだ

部活を辞めた理由はそれぞれだがまあ大変だったんだろ

「柏木の家の近く本屋さんあつただろ? たしか。せつちに行けばいいのこ」

「せつこ」に對して俺はこう答える

「いや、さつちゃん。確かに欲しい本^{マンガ}そつちに行つても手に入る…
しかし…その本屋で手に入るのは本だけ! 聖地に足を運ぶ事によつて! ポイントが! 特典が! つこのだよおおおおお!」

「おおう…なるほど」圧倒されるさつちゃん

言こわつて満足げな俺

そして「いや、シ○ヤだからポイントはそつちでもつくだろ。しかもアキバいぐのに足代かかんじゃねえの? 家反対方向だろ?」じゅん。

「それは言わないお約束！！」

人生が変わる瞬間

何がどうなつてこうなつてそつなつた…？これはちょっと整理が必要かな？

さかのぼる事40分…

俺は結局秋葉原に一人でいった

実際ここに一人で来ることはあまりない

いつもはじゅんやきつちゃんや他の友達に付き合つてもらつてゐるの
だが…人にはそれぞれ事情があるからな。仕方ないとしよう

「おつ！あつたあつた」

とあるマンガの新刊を手にとり、レジに向かう。

読んでもらつたように俺はビンボヤージュなので三冊買つたりは出来ない…

それだけではなくお金が入つたら絶対買おうなど思つていた糸田を
つけていたグッズなどもお金が入つた時には既に売り切れているこ
ともある…

これで何度も海水でもないのにショッピングをグビッとしたことか…

やつぱり節約は大切だと思う。バイトしたいなーきっとちゃんとうらやましいなー。

「ポイントカードはお持ちですか？」

つと、
とんでた

「あ、はい、これお願ひします」

」のポイントたまる瞬間が幸せかんじるよね。

商品を受け取る

「もとより」

「ありがとうございました！」店を後にする

「さてと、帰るか？」

帰ろうと駅に向かおうとしたのだが、ふと反対側のショッピングの前あたり、というか横の路地？をみると俺ぐらいの身長の男三人？と制服姿の一人の女の子？が話しているのが確認できた

いいな、俺だつて女子とお話ししてえよ…でも恥ずかしいんだよね…

一度仲良くなつたら普通に会話できるのだがそうなるまでちょっと何と言うか…ね?後頭部辺りがかゆくなつて目をみると言葉が出なくなるんだよね…故に只今高校生活始まつて七ヶ月くらいたつけどガールフレンドは一人もおりません

ハ
ア
：

その男女を横目にみながら帰ろうとしたがおかしい…あいつら何やつてんだ?なんで女の子制服なのに野郎どもは私服なんだ?しかもあんなとこで…

不審に思つて自然をよそおいつつ近づいてみる…コンタクトをつけなかつたので氣づかなかつたが言い争いをしているよつと見える…

「いいじゃんちよつとくらじ付き合つてくれよー。」

「…」「めんなさい…それは…無理…」

なんぞこれ…?ナンパ!/?俺は隠れるよつとして様子を伺つ端から見ればそつちのが怪しいがナンパなんか初めてみるからちょっと見てみたくなつてしまつた…

女の子は一人共…めがつさかわいい!!

一人はエメラルドグリーンの髪の色で目は鋭くスラッシュした体型でもう一人は… その子に隠れるようにして後ろにいるためわかりにくいが…身長が極端に小さく桃色の髪の毛をしていてとても怯えているよつ…

「いいからこいよー!」男の一人が乱暴に女の子の腕を掴む

「いやつ…やめて…!…」

「みなみちゃん!…」

スレンダーな女の子は声をあげる

それをみて小さい子は男に向かっていく！

「みなみちやんから手を離しト。」

「うるせえチビー！」

「那邊...」

が、付きとばされてしまつた……

何だよ…この急展開…!!

俺、全身が震えてる……どうしたらいい……！？助けにいくか……？でも勝てるか？相手は三人だぞ！？また……落ち着くんだ！ほら、人だつて通つてるだろ！？俺がいかなくたつて……どうして素通りすんだよ……！見ろよ！女の子困つてんだろ！小さい子なんて涙目じやん！だれか助けてやれよ……電車男だつてがんばつてたじやん……クソつ！どうして誰も……

そう思つた時、一言。たつた一言の言葉が脳裏をよぎつた…

「お前が行け」

ବୁଦ୍ଧିମତ୍ତା କାହାରେ ଥିଲା ?

柏木ひろ！

逝つてきます！・！・！・！・！

決心がついた時、もう一人の自分…いや、おれの中の悪魔がこうさ
さやく…

いいのか？カツコつけていつて負けたら恥ずかしいぜ？見ろよ
あいつら、たちわるそだぜ？きっと負けたら全裸にされるな！！
！」

ここに来てまつパ宣言！？

「まけねえよ!! 負けてたまるか!! 第一!! こんなとこで全裸にされる
わけねえだろ!! 引っ込んでろ!!」

必死に抵抗する俺

モハスター上に立つてしのの丘…!! グリーンスター上、前
なのに…!!

「いや。お前は負ける！相手は三人だぞ？勝てるわけないだろ！ほら、手足震えるでぜ～？こわいだろ？お前ビビッてンだろ？あつははは！」

だめだ…恐い…嫌だ…全裸にされたくない…そろそろこの下りダル
いと思つてゐる読者の田も恐い…俺はどうせへタレなんだよ…もう無
理だ…帰ろう…

そう思つた瞬間だつた！！

「まへい！そこの者たち！オナゴから手をはなせい！」

と、勇ましい（？）声が聞こえた！

振り返つて見るとよくわからん特撮もんのヒーローみたいなカツコ
したやつがいた！

「何だてめえ！」

男の一人が凄む。

ヒーローは「せつ、拙者は、あの、現代に生きる忍者、ナウニンジ
ヤーでござれ……あつ、ござる」

忍者も凄む！……？

まさか…かんだよなあいつ…！…？

男たちもちよつと呆れた様子で

「イタイんだよ、邪魔ださつとかえれよ！…！」

と怒鳴る。しかしナウニンジャーは…

「せつせつこうわけにはいかないでござる。早くオナゴから手を離
すでござる。さもないとこの神刀で…」

「……からりやつせと帰れ…………」

ナウーンジャーはもぢろん女の子達もビクッとなるほどの声で怒鳴る。（ちよつとかわいいかった……無論女の子がね！）

「す、すこませんでしたああ……」

ひりひに逃げてぐるナウーンジャー。

俺、頭冷えた…

俺の将来の夢、警察官だよな…困ってる人、弱い人、守らなきゃ。

弱くてもナウーンジャー、がんばってたよな…かつこわりいと思つてたけどホントにカツ「わり」のは俺だよ……

そう気付かせてあんただ…ナウーンジャー……

「ナウーンジャーさん！あんたの立場は俺が守る…だからあんたの神刀、俺に預けてくれ……」

「ハア…ハア…へ…？」

「早く来いよ…オラつ…」

「痛いっ……やめて……お願い……離してっ……」

「お願い……みなみちゃんを離して」

「うるせえっつてんだろ……」

「バシン！嫌な音が響く……」

「う……う……みなみちゃん……」

「ゆたか……いいから逃げて……！」

「駄目だよ……みなみちゃんを置いてなんかいけない……」

その時みなみはアイコンタクトを続ける。
(誰か人を……泉先輩を……) パクンとつなずくゆたか

そして助けを呼ばうとして走りつとした瞬間、別の男が手を掴む

「ほつとこうと思つたけど人呼ばれたら厄介だからな！お前も来い……」

強く握つて引つ張りつとする……

「痛い……いや、いやあああああ誰か助けて……お姉ちゃんああん……！」

「いい加減しれお前、アアアアア……」

しまった俺もかんだ……！……じゅん……もう一度とお前から金はかりねえよ……

「またわけわかんねえやつがきやがつた……なんだてめえせつせと消えろ！殺すぞ！」

女の子の手を離し俺の胸ぐらを掴む……

「チ……つて音がした……たぶん聞こえたのは俺だけ……」

「ゴツー！……バタン……」

迂闊に胸ぐら掴むんじゃねえよ……アゴにカウンターくらひが……？

「ヤソ」と笑う。

「てめええええええ……！」

もう一人、別の男が 走ってくる。

オイオイ、 そんなに走つてくんな……よつ！

はいっただ……！……

バタンと腹部を押さえながら倒れこむ。

別に大したこととした訳じゃない。走つてくる相手に合わせて前蹴りをくらわせただけ……無論溝にな……！

「オイ、な、なんだお前何で……！」

「俺？俺はしがない高校一年生。オタクだよ？びびりでヘタしなね」

「ふざけんなああ！」

鉄パイプもつてきやがつた……！

がしかし……！

ガーン！！

「ひちには「神刀」がある……！」

ドスツ……

「……！」

「「ひちにはこの模擬と……あつー違う、神刀があるんだ。諦める」

柄頭で腹入れてやつた……

「クソッ……！」男は俺を睨みながらどこかに行ってしまった。

後の二人の男も追いかけるようにして同じように……

フウ… 今日から俺も「現代のサムライ」って名乗るつかな…

ドツと汗が吹き出た！あああああ恐かつた怖かつた！俺死んでた…何か覚醒してなきや絶対死んでた…こえええええ…！！！東京まじ恐い！なんで秋葉原にあんなのインだよ！恐ろしいなあああ！！！

「あの…大丈夫ですか…？」

ハツと我に帰る！

そこにはあの小さい子がいた

「あつ！すいません…！そちらけそ大丈夫ですか…！？」

しまつたかんだ…！もういや…緊張する…

「私は大丈夫です…！あの…助けてくれてありがとうございます…！」

ペコリと頭をさげる

みなみと呼ばれる子も来て

「本当にありがとうございます…」と礼を言ひ。

かわいい…！…直視出来ない…！…！

ヤバい後頭部が…

「あつと、その、いや、俺なんか別に…何もしてませんよーー?あつ俺にお礼言つまえにあのナウニンジャーに…」

後ろを見るとナウーンジヤー……いない！えつ！？一緒に戦つてなかつたつけ？俺が「いい加減しろコラアアア」って言つた時まではいた気がしたんだが……

あついた！物陰にかくれ……何であそこにいる？一緒に戦つてくれてなかつたのか？何かしてるな……？あー……俺の目がおかしくないのならば彼はこういつてる。

「グッジョブ」

えつ！？なんでだ！？確か

「神刀あずけてくれつ」

— なんでもござるか！？

「あの女の子達を助ける！だからナウーンジャーさんの神刀を貸して欲しい！」

「えっ！？」で、でも…怪我しても知らないで」「さぬよ？」

そういうつてナウーンジャーさんは模擬刀を貸してくれた

「心配してくれてありがとうございますー。では逝つてしますー。」

走つて行ひたとした瞬間だつた。その時

「まつで」ざれるー。拙者も一緒に戦つで」ざれるー。男が」のまましつぽ
巻つて逃げるほど恥ずかしこほじつぱはもつて」ざらんぢ」ざれる
よーーー！」

……なんかおかしい氣がするが…。まあいいや！

「そうですか！頼りになりますー。」

「まあこへで」ざれるーーー！」

……つて感じで一人で行つてたのに……

「……いえ、何でもないでや……。それより早くこんなとこによつ早く
く大通りでましょつか」

いかん、テンパつて一回おんなじ」とこつてしまつた…「おお…後
頭部が…。

二人はうなづいて俺について来るよつとして路地をでた…

携帯で時間を確認してみると……「お、まだ秋葉原ついて30分ちょいしかたっていないのか……スゲー時間たつていいようを感じたんだがな……忍者どこいった……？刀返さないと……」

「あのう……」

小さい子が声をかけてきた。

「俺さつしき敬語使つたが……高校生……だよな？」

「あつーはい、なんですか？」

「お名前きこてもいいですか？」

「へつ？あつ名前ー？ああ柏木ひろです」

とつあえずフルネームで答えておく
すると

「柏木さん……えつと私は小早川ゆたかです」

「岩崎みなみです……」

「わつときは本当にありがとうございました！柏木さんがきてくれなかつたら大変なことになつてたかも……」

横で岩崎さんがうなずく。

失礼だけどこの子たちナウーニジャーの」と忘れてないよな…

「いえいえ本当気にしないでください… あと一人共高校生… ですよね? 僕は高校一年なんで敬語使わなくてOKですよ…」

「フウ… やつと慣れてきたかな…?」

二人は少し困ったように顔を見合わせる

「あり? ちょっとフランク過ぎたかな… と思つたけど二人はニシコリ笑つて(…かわい過ぎる…)

「う、うんそうするね! 柏木くん!」 とちょっと照れながら言つて
くれた。

岩崎さんのほうも「承してくれたみたいだ…

「どうも… それにしてもさつきはば”めん” 僕がもつと早く来てれば…」

すると岩崎さんは申し訳なさそうに

「柏木くんは何も悪くない…」 と言つてくれた

小早川さんも

「そうだよー柏木くんは悪くないよー悪いのはあの人たちのほうだし…」

「いや、違うんだ… 僕、本当はけっこつこう最初からいたんだけど…

怖くて動けなかつた…逃げようとも思つた…でもそんな時あの…さつきいた、ナウニンジャー…つてやつ。あれがきてからちよつと思つ出したんだ…初対面の二人にいつても仕方ないかもしぬないけど…俺、警察官になりたいんだ…理由はわかんないけども、警察官つて困つた人を助けるのが仕事だろ?だから一人が困つているのを助けられなくて警察官になれるかよつて思つてさ。かつこわりいよ…別の人人が動くまでなにもしないなんてさ…あつ…ごめんペラペラ喋りすぎたかも…」

ちよつと焦る俺。次に口を開いたのは柏木さんだった

モジモジとした様子で

「私はかっこいいと思う…。怖かつたつて言つたよね…?でも勇気を出して助けにきてくれた…。そんな柏木くんを私はかっこいいと思つ…」顔を赤らめてそつといつてくれた

俺は驚いた…そしてこの胸の奥が熱くなるのを感じた

しかし一番驚いていたのは小早川さんだった

みなみちゃんがこんなに喋るなんて…と思つてそうだ。

すると「柏木くん、そんなに謙遜しないで?私達を助けてくれたのは事実なんだし…だからもつと自信もつて!ね?」と小早川さん

はい!…自信持ちます!…かわい過ぎるううう…」の二人、純粹過ぎる!…しかしそれ故か?なぜナウニンジャーのことを一言たりとも口にしないんだ?一人が助かつた理由の半分以上は彼にあると言つても過言ではないよ!…まあ気にしないことにするか…この刀、どうしよう…

「え…と…」「一人共ありがとう…少しは自信がもてたよ…」

二人はまたニッコリ笑って返事をする。まさにキラースマイル！！

所でこの一人は何してたんだ？見た所オタクっぽくないし…家が近いのかな…？聞いてみることにする

「所で二人はアキバに何か用でも…？」

すると小早川さんが答えてくれる

「あつ私達は用があるわけじゃないんだけど…」

「じゅ」とだ？

「…え？ そうなの？」

「うん、実はお姉ちゃんとみなみちゃんと三人で来ててね？」
用があるのはお姉ちゃんなの。私は帰りにお姉ちゃんと夕飯のお買
い物しようと思つて…みなみちゃんはついてくれたんだ！」

納得。

「ああなるほど。あれ？ そのお姉ちゃんは…？」

「それが…」

「ちょっと見てくるからねーちゃんたちはまつてー。」

「えっ？ せっかくだからついていくよ？」

いいの！ おーかせん達にはまだひよいとせやいかり！」

ええええええええ / / / /

「それから中々戻つて来なくつて…」小早川さんは心配そうに件のショップ周辺を見る

右崎さんも同じく心配そう……

「全く！ なんてお姉さんだ！ 妹達を待たせてあんな怖い思いをさせて…」
「…」これは相手が年上でも一言ガツンと言わないとな！

（本人はじゅんやきつちゃんに全く同じ」とをしていることに気づいていない模様：）

すると小早川さんは「あっ！戻ってきた！おーい！こつちだよー！」「と手を降つてゐる。

おつきたか…どれどれ…？んつ、あれか…？あの手にいつぱいなんかもつてる…えつ…？あの人もなんか妙に小さいな…あつ！なんだ遠近法か！なるほどな～。違え！一ホントにちつさいんだ！

俺はしばらく呆気にとられる。.

「「めんじめん。だいぶ待つたでしょ。ホントにじめん~」

彼女は言った

小早川さんは「ちょっとへたくたかも~」と笑いながらそれに答える

えつー? それでいいの? この人せいであんな怖い思いしたのに…まあ… それだけ姉妹仲良いってことなのかな…

「みなみちゃんも」めんね~お詫びに先輩がゆーちゃん達に何かお「」してあげよおつ…

「えつー? いいよ~悪いし…」小早川さんはひたすら

若崎さんも遠慮がちだ

それにしても見事に俺そつちのけだな…別にこじけだ…

「いじからいじからーちょっとあそひよつてつー…」
つと半ば無理矢理一人を連れてこつとある。

その時不意に彼女と目があつ。

「おつと俺は… その… 何と言つか…」 これはテンパる…
ちょっと田が怖い…

「えつと俺は… その… 何と言つか…」 これはテンパる…

「もしかしてナンパ？駄目だねえ……やーちやん達の優しさにつかっても悪いことしてもやりますせん……」

小早川さん達が必死に弁解しようとつてゐるのだが妹達をやがてつてこむためか！？その妹達の言葉に耳を傾けていない……

「やーちやん達はひよつと待つて……」

その瞬間にユウリと風切り音が聞こえる

俺は咄嗟に田の前にとんでくるものを避ける……

「うおっ……！」速やかに彼女の拳が頬をかすめる……

「中々やるな……なにがばれはざだ……」

次々と技が繰り出される！俺はそれをさばくので精一杯だ！

「うよつと、うよつとー待つて、うよーとあこー、うわつ……」

「問答無用ー私と言葉を交える事ができるのは私と拳を交え、勝利した者のみよおおおおー……」

必死に聞合こをとる！

なんだこの人……半端ねえ！小早川さん達を見るとオロオロしている……あてにはやさうにない……これはちよつといつも本気でや

うねばならんか……？

「まあ少年！かかるてここー！」

いいだろ？…誤解を解くには勝たないといけない…

この戦い！俺の勝利で幕を閉じる！…！

……これでわかつたでしょ？

何がどうなつてやうなつてこいつなつたかが…

こじまでわずか40分…
さて…やるか！…

輪は水辺の波紋の「」

ぐつ……！ 驄目だ……何という速い動きだ……俺の攻撃は全てさばかれる！

「うおつ……！」

刹那！

俺の放った拳は見事にかわされ足をかけられそうになる！

あ、危ない所だった……！

慌てて間合いをとる！ が、その瞬間相手は間合ひをつめてくる！

くつ中々きついな……だが甘い！ 間合いが近いところとは俺の「投げ」の間合ひに入るところ！ …

「とつた！ 失礼！」

すかさず前に手をかけそのまま足をかける！

ダンッ……

……？

なぜ俺が地面に倒れている！ ？

あの状態でじつひつと反された！ ？

「チツチツチツ…まだまだだねつ！」

少女は余裕の笑みで手招きをする…

俺は咄嗟に起き上がるが、足がフラフラだ…俺は体力が極端にない！大体なんでこんなことになつたんだ！？俺はナンパなんかしてないのに…クソつもうだめか…？

そんな時、日本で、いや、宇宙で一番熱い男の言葉を思いだす…

…いや、駄目じゃない！…俺はあきらめない…まだだ…まだやれる…

落ち着くんだ…まずは相手を良く見ること…そして考えろ…

……

動きにキレとわずかな規則性があるな…

そして見ず知らずの相手にも臆することのない度胸！

あの理不尽投げ反し！

格闘技の類をやつていたに違いない！

ならばこいつもありつたけのフロイントをかけ仕掛けてきた所を力
ウンターで仕留める…！

といつてもカウンターはさすがに…

いくら強いて言つても相手は女の子！

ましてや小早川さんのお姉さん！

カウンターは危ない、

無理だ！

つて言うかカウンターなんか当たられるかつ！

「」で説明しよう！

「さつきの勝利について

柏木ひろがさつきの対不良戦で生き残る」とができるのはある条件
が整っていたからである！！

条件その1！

相手が襟首をつかんできた！

これは先制攻撃のチャンス！アゴにヒックセラルことができる！

条件その2！

相手が冷静さを失い突っ込んできた！

冷静さを失っているためカウンターの蹴りをかわすことができなかつた！

条件その3

柏木ひろは武器をもつていた！

彼は剣道をやつていたため素人との武器での戦いで負ける自信がなかつたのだ！

条件その4

敵は一斉に来なかつた！

もし三人一気に襲つてきていたら柏木ひろは今頃地面となかよしこよしだつただろう‥‥

そして条件その5‥‥！柏木ひろは冷静さをもつていながら熱い男だつた‥‥

それだけだ！‥‥‥

もうただ単に運がよかつただけとみえる‥‥

そんな彼が格闘技経験をもつ彼女に勝てるのか！？

では失礼‥‥‥

‥‥！攻撃してもさばかれて反撃される！カウンターも出来ない！投げも返されたやつしかしらない！‥‥どうすれば‥‥‥！

考える間も攻撃は繰り出される！

たぶん俺剣道やつてなかつたら最初の突きでアウトだつたな……

剣道か……

懐かしいよな。あの時はヤバかったな……恐怖さえ覚えたよ……相手は強豪でかなりでかくてさ、あつ、無論負けたがな……でか過ぎるんだよ！その上速いんだ！
あれはチートだよな～……

……！？

……わかつたぞ！……

そうか！勝てる……！

俺はチャンスを狙う！相手はそれを読んだのか攻撃の手数が少なくなる……

だが甘アアア～！～！

俺は大きく一步でる！～！

上段！～相手は片手でそれをガードしようとする！

がそれはフェイント！俺は空いた所に打ち込む！

少女はハツとし、慌てて両手でガードしようとする。なんて反射神経だ……完全にガードが間に合つ！

が、それもフェイントだああ！

この瞬間を待つていた！俺は彼女の両腕を掴む……

「ヤリ……！」

俺の……勝ちだああ！

確かにこんな組合いで全然したことない俺と格闘技経験のある彼女の中にはかなり大きな実力差がある！

しかし……圧倒的に俺に有利なものがあつた……

それは筋力差と体格差……

横になぎ倒されようが蹴られようが俺はもうこの手は離さんぞ……よし！このまま押し倒してくれるわ！ふははははは……変態

……

「あちやーもう少しだったね……残念！」

「は……？」

彼女の体勢が急に低くなる

それと同時に彼女も俺の手首を掴み足を俺の胴体に……！

足が浮いた？

「えつ！？あつー～ちよつーめつー～」

「しつかり受け身とつてね……」

最後に脳裏に浮かんだのは一人の笑顔だった……

Hiro is over.

「知つてたああああー!?

「うん、もちろん全部知つてたよ。」

俺はびつくり仰天！

先程見事に巴投げを食らった俺はそこで戦闘を続けることは不可能と判断し、降参してしまった…

「…もひ無理です…降参します…参りました…ひべつ…バタつと
な」

俺はギブアップした。

「か、柏木くん！」

かけよつて来てくれる小早川さんと若崎さん

「ああ…大丈夫っす。」

実際芝居なので平氣なのだが…

「いめん、ちよつと離れてて」

俺はひよつと見せ場を作るため仰向けになり、腰をまげ、手を頭の横につけ、勢いをつけて…よつ！

ダンッヒー

成功！小早川さんのお姉さんも、おー、と喜び顔でみている

俺も少し得意げになる

そして色々聞こひとして少女に話しかけよつとした

その時！

すると周りからは拍手が聞こえてきた…ピカピカひかってる…！

「えつ…？」

いつの間にかギャラリーがたくさんいる…！…ちょっと…カメラは勘弁して…全然気づかなかつた…まあそりやそうだ。こんな街の真ん中でこんなことしてりゃ人も集まつてくるだろ…

俺はもうりんあの小早川さんのお姉さんも驚いているみたいだ

すると

「おお…！」これはちょっと困った事になつた…うん…事情は後で説明するからさつ…ついてきてよ…ゆーちゃん達も早く早く…」そう言つて彼女は凄いスピードで人ごみを抜け、走つていつた…

はつ…？事情？何の事…？

「ちよつ…待つて下さいよ…！」俺は慌てて追いかける！

小早川さん達も

「えつ…？待つて…！お姉ちやーん…！」必死に追いかける！

何なんだあの少女は………………

「ハア…ハア…ゴホッ…つえ…ハア…ハア」死ぬ

「ハア…中々やるねーきみ！ハア…だいじょぶ…？」

彼女はうつむいている俺の顔を覗き込む。俺は死にかけてたがこれだけはわかる。この子も死のほどかわいいいい！！！

さつきは気づかなかつたが凄く可愛いな…

この薄紫青色の髪の毛、ミントグリーンの瞳、そしてこのアホ毛、泣きぼくろー身長ー貧（ry！

日本に生まれてよかつた…

「ハア…ハア…ちょっと大丈夫じゃないかもです…ハア…ハア…所で小早川さんたちは…？」

キヨロキヨロと見渡す二人…

すると遠くのほうから歩きながらくる一人がみえた

「ちよっと…ハア…ハア…お姉ちゃんもハア…ハア…柏木くんも…速すぎると…ハア…ハア…」

小早川さんは若崎さんに支えられながらゆっくりと向かってくる

「ゆーちゃん達ホントにごめん！！！大丈夫ー？」

少女は慌てて駆け寄る

何なんだこれ…今日はよくわからん日だな…

「やつと全員揃つたね。じゃ、このお店入りやつよ。」

建物の三階

ふと見ると…コスプレ喫茶…！？

俺はちよつと…

小早川さんもちよつと抵抗がありそうだ…

気にせず入つてく少女…

もういいか…今日はスーパー振り回され、ディだ…

「小早川さん、岩崎さん、行こつか。」俺も入ることにする

「へ、うん…」

二人もついてくる

「お力エリなさいませー！」シユジンサマー！」

えつー？!!ル！？ってか外国のかた！？可愛いな…

「パーティちゃん！？」

後ろで小早川さんが驚く

えつ…？何じや…？

知り合い？

「パーティお疲れーーきたよー」

「〇〇ー！こなた！おカエリデス！…ゆたか！みなみー！ダイジヨウブ
デスカ！？ケガはありませんか！？」

「えつ？パーティちゃん？」

…？

何で？

小早川さんも岩崎さんも状況が把握出来てないよ、

「シンバイしましタ～…！アレッ？こちりがさだらサマデスカ？」

ふと田があつ…

う…また急に殴られないよな…

「あ、この人がゆーちゃん達を助けてくれた人。」

はつー? 何だと!?

「〇九一ホントースカ! ワタシのトモダチタスけてくれて、じつもアリガト、いやこまス!—」

ペコっとお礼をされる

「あー、いえ… って言つか、えつー…ビックリですかー?」

少女にとづ

「うーーお姉ちゃん、びっくり! 何でパーティちゃんが知つて、えつ? お姉ちゃん知つてたの!?」

小早川さんもしごれをきりしたようだ

「えつ?…」

少女はちよつと焦る

「まま、タチバナシもなんですか、ナカヘビツギ
パーティちゃんとやらがフォローする

「あ、そつだねーそつよーーか、こじこじーー中で説明するから
!—」

少女はそそくさと入つて行つた

「あつー。ちよつと待つて……」

「アーティストの心」

店内に向かつて手をさしのべる

— 柏木くん、行こ…… 岩崎さんが俺を誘う

「うん！」

「OK! 四名サマー」案内データス

「おーこじるまじーじゆくねーーー」

店のテーブルに座っている人物を発見する

あの恰好、あの喋り方あれは……あいつは……！

何だあいつは！神出鬼没か！？何なんだああああ！あつ！これ返さなきや！

「お、落ち着いて！柏木くん！」

小早川さんになだめられる… ちょっと熱くなつてしまつた…

「えつと...」「おんなじで」「自分も怖かったんで」「それな
画面なこで」「やれやれ...」

、空気が悪くなつた。どうかせんと

「べつ、別に責めた訳じゃないよ…いや、俺も怖かつたしさ…実際俺を動かしてくれたのナウーンジャーさんだし…そ、そんなに謝らなくて…お、俺も言い過ぎたよ…」

「ア、アニキ……………！ ありがとウド、ジガる！ 一生ついて行くで、ジガる……所でいつ拙者がアニキをうづかしたんで、ジガるか？」

「い、いやそれは…ああーいいじゃん！なんでもないよ！それより早くすわろ！」
やけになつてしまつた…

「ジンバーレー」

耳元で少女が囁く

「「うわー…ちゅー…違いますよー…それより事情説明してく下さいー」

ああああーむちゅやくちゅやだああああーー！

落ち着け、落ち着け…他のお客様さんもみてるー。

「…すいません、取り乱して…」

「「まじでやめ」となこド」」れるよーーあ頬をさすめ座り下すこド」」れるー。」

なんであんたが言つんだ…

眉も咲笑いで座る…少女以外は…

「では今から説明会を始めーー。」

少女の声が響く

パチパチパチパチ

「つ前に自己紹介しつくね。私の名前は泉こなた。よろしくへーち
なみに私高校三年だから」

やつと名前わかつたな、ん? 泉? 小早川さんのお姉さんなの?
? まあ後で聞くか 最後のは敬語使えて意味だな こなた? ?

「拙者はナウニンジャーでござるーーえつーー本名こや、それは
わかつたでござるーー本名は坂上なおとでござるーー高校一年生でござ
る。よろしくでござるよ」

同学年だったのか こつまでこの喋りかた続けるんだ? ?
つて本名普通だな

…あつ俺か

「柏木ひろです。高校一年生つす。よろしくお願ひします」

泉さんはそこで何故か少し考えてしづらしくして元の顔に戻つた

「はーーー自己紹介終わつ。じゃあ説明始めるよー。」

「「「あん」「あん…ゆーちやん達おまたせー…つてあれ…?」

辺りをみまわすがゆたかもみなみもいなし…

「二人ともどこに行つたんだる…んつ？」

あれは… 何やつてんの…！？

ふと見たところには怪しい恰好した人が路地を覗いてる…

怪しいのでほつとこうと思つたが、ゆたか達がいなくなつたのと関係あるかもしないのでこなたは声をかけてみることにした

「ちよつとそこの人…何やつてるのー…スゴく怪しいよー？」

すると彼は振り返つてけつ言つた

「えつ？…さうで『やれるかー？』って今はそれ所じやないで『やるの…』…」

なんか慌ててるので何だらうと思ひ彼女も路地をみる…

「…」

そこにはゆたかとみなみガラの悪い男に手を掴まれてゐるのが見えた…！そして手前では制服姿の刀みたいなもつた男子が何か叫んでる…

「ゆーちゃん…！」

助けにいかなくちゃ！

そう思つて走り出した瞬間彼女は腕を掴まれた！

「……？」離して！ あの怪しい男だ

彼女は掴んでる腕を必死に払おうとする

「待つでござる！ 彼は今戦っているでござる……男の戦いでござる……」
彼は怖くて逃げだした拙者の立場を守ってくれると言つて戦いに行つたでござる！ 初対面の拙者にござるよ！ だから信じて待つでござる！ 頼むでござる……」

彼は必死で訴える。

彼の言い分はわかつたがやつぱりほつといてはおけない！

「言いたいことはわかるけど……もしあの人が負けたらゆーちゃん達がどんな目にあうかわからないよ！ 私は助けに行つてくる……」

そう言つて行こうとした時彼女は目を丸くする……

さつきのガラの悪い男の一人が地面に体の箇所をおさえながら倒れこんでいる……！ そして少年は刀を抜いて最後の一人とつばぜり合いになつている……と思つた瞬間相手は腹を押されて膝まずいていた：しばらくして不良は三人ともどこかに行つてしまつた……

「スゴい……一人で全員倒しちゃつてる……！」

「ほら、言つた通りでござる……」

怪しい人は得意げになつてている

「あつ！ お礼しないとつ……」

……所あの少年どうやつてあの不良一人倒したんだろ……一瞬だつたよね……気になるな……

…元武道家の血が騒ぐ…

「ねえ、〇〇ビルの三階のコスプレ喫茶知ってる?」「怪しい人に言ひ。

彼は何か合図を送っていた

「へっ? ああ知ってるだ?」さるよ。それが…?」「

「そこにに行って待つてて! 後で言いたいこともあるし…」

「えつ! ? 別にいいでござるが… あつ、一言こつてから…」

彼は少年の所に行こうとする

「ちょっと待ったーー! あの人には内緒で! 早く!」

彼も少し焦つて

「わ、わかったでござるよ…。所でお主せまでつするつもりでござる
か?」

「ヤリ…!

「私はちょっとやることがあるから… じゃ、あとでね

「り、了解でござる…」

彼は走つていった…

おっとこいつに来るー

彼女は慌てて店内に戻りトイレに…

そして携帯を取り出しばいかに電話をかける…

「…あつもしもしーパーティ? 私私、こなた。うんそそうだよ。今アキバ。うん。うん。実はねーゅーちゃん達が不良にからまれちゃつてね。ホントホント。うん大丈夫。それがね、一人の少年が勇敢にも神剣を携えてゅーちゃんたちをすくいだしたー! って感じでねー。もうちよいしたらお礼がてらそつちいくからさ、席あけといてよ。うん、ヨロシクー」

…さて、準備は整つた…
いざ、参らん…!

「…つてわけ!」

「「「ええええええええええええええ…!」」

俺は驚いた…

「じゃあ全部知つてたんですか…!?

「うん、知つてたよ。」

「すいませんアーキ…」

また謝られる

何だ…じゃあ全部仕組まれていたことだったのか…!?

…まあ去ったことだ。気にしないでおい!

「では気を取り直して…柏木くん…でいいかな?柏木くん、ゆーちゃんとみなみちゃんを助けてくれてホントにありがと…お礼といつたらあれだけ…好きなもの頼んでよーもちろんゆーちゃん達もね!」

「えつ…いいんですか?」

ちゅつと困惑。初対面の人におじつて貰つて何か変な感じだ…

「いいのいいの。遠慮しないで…ほらゆーちゃん達も…」

「ホントにいいの、お姉ちゃん?…じゃあ、わたしは…これ…」

「じゃあ…私はミルクティーをお願いします…」

一人は頼み始める

「オッケー!柏木くんは?」

おっと、ここはまあ「ちそこなるか…

「いいんすか…~じゃあ俺は…このカフエオレをお願いします」

「拙者は…?拙者もいいでござるのか!…?」

がめついな…

「坂上くんはゆーちゃん達助けてくれなかつたからなー。どうじょうかなー」

「そんな意地悪いわないでぐださこで！」やれるや〜

小早川さんと吉崎さんの顔から笑みがこぼれる。

俺もつられて笑つてしまつ…

なんだろな…初対面の人ばかりなのに何か落ち着くつていうか…じゅんやきつちゃんといふ時と同じよつた感覚だ…しかも三人女の子…まるである時の時を思いだすな…

おう、思い出に浸つてゐだんじやない。今はこの時間をたのしむつ…

「なるほどいといじ関係なんですか。でも何で『お姉ちゃん』？」

俺は訊ねる。

「え、と…それは私が小さい時から面倒みてもうつたからかな…昔からそう呼んでたから」

小早川さんが答える

なるほど、謎が解けた。残っている謎は、何故か泉さんとは初めて会つたつて感覚がしない……それと……それと……

「どうしてお前がそんなにイケメンなんだってことだけだ！」

なおとを指差す（）の短時間でだいぶ仲が良くなつた
急に指咎され驚くなおと

「くつ？ 指者でいるか？ イヤイヤ、アーニに比べたらこんなの大したことないじゃねるよ～」

なんだこれー？ 謙遜か嫌味か……！？

……わざわざよくわからんかったがマスクをとった瞬間このイケ
テるメンズ！

「でも柏木くんもけつひのモテそうな顔してるよね」

泉先輩からありがたいフォロー……

「あ、ありがとう！」わざわざ……でも今はむなし……」

カフェオレをすする……

なおとは少し申し訳なさそうである

ホントにイケメンだな……金髪に中々高い鼻、けつひの身長も高いし……

「ヒ、所でみんなさんはどこで学ぶの学校で？」やるか？」

「ひとつ話題を変える

「私たちは陵桜学園！。埼玉にあるんだけど…知ってる？」

聞いたことあるな…

「陵桜…？あの結構偏差値たかい？じゃあ泉先輩たちだいぶ頭いいんですね！」

実際スゴいと思った

「まあねーそれほどでもないよーふつふーん」

泉先輩先輩は得意げだ

「柏木くんは…どこの学校…？」

岩崎さんに聞かれる

…キレイな声だな…声優なれるんじゃないかな…？

「あつ、俺は…あんまり頭よくなーい」と、だけど…東商高校…

「へー…どこ？」

知らないのか…

「…あ。知ってる…家の近所…」

…岩崎さんが知ってるってことは…

「えつ、じゃあ岩崎さんの家の住宅街のどこかー…？」

「クリとつなづく

おのお金持ちが住んでるあの住宅街…岩崎さんはブルジョワだな…

学校から帰る時いつもあれを見ながら帰つてた……いいな……と思ひながら……世の中せまいよな……

「あつ！柏木くん！間違つてたら！」めんね！

！？

急に泉先輩が話し出す

「えつ……何ですか急に……？」

「柏木くんって本名『ひろ』だったよね！？もしかしてあの『H-i-『O』くん！？』

！…！

誰もわからな
い…
俺以外は！

すべての謎が解けた……なるほどな…

「じゃあ泉先輩は……あの『kōnako』さんですねー！」

「イエエスー！」

「うおおおおおおー！繋がつたー！
スゴイー！こんな偶然あるのかー！？」

「スゴい偶然ーーー！んなことも有るんだねーーー！フラグキタコレーー！」

俺は少しショックとする。『うつ』『うつ』『うつ』

「その説は正しいありますー。色々アドバイスとか、え、
と…これからもよろしくねー。」

「うん、ありがとうございますー。じゃあ、柏木くんじゃなくてひるくんでいい
ねー。」

！――！

ひるくんか…昔を思いだすな…悪くない――！

「せひー。」

「あの…お姉ちゃん…どうこう…？」

小早川さんがたずねる

「ん？ 実はね、柏木くん今私がやつてるネトゲで一緒にパーティー
くんでる人でね！ その時のネームが『エユトロ』だからリアルでも
そう呼ぶことにしたってわけ。 ゆーちゃん達もそうしたらー？ 喜ぶ
よー？」

「ヤニヤと笑つてゐる泉先輩

ちゅつと困つてる小早川さん

「え…それは…私男の子を名前で呼んだことないし…ね、みなみち
やん？」

可愛いー！わかるかなー？」の、なんか、顔赤らめてモジモジしてゐる様子！

「えー、う、うん……でも……私は別に構わない……」

お崎ちゃん……

感動で柏木王国の住民たちは拍手喝采であった

「え……じゃあ私もそいつよしきか……いにかな、柏木くん……？」

ドギヤー——ンー

「も、も、もちろんだよー……」

「△△を断る愚か者がいるだらうか……いや、いなこだらう……」反語

「じゃあ私もそいつあるねーよろしくね……ひろくん？……」

えー……全国の「ひろ」と並んでのつく諸君。幸せひとまわいりの「ひ

です。あつはははははは……」

「よひしきです……つてこつかよひしき、とかひろくん、
とかなつてもどりするんですか？学校も違つし家も知らないし、ま
た会えるかどうかもわからないし……」

「ひー」一気に興奮が醒める……

すると泉先輩

「心配する」とないと思つよ。ひろくん結構アキバな人だからここにきたら結構会えそうだし。後私達ネット仲間じゃん？それに私たちには「れがあるではないかー！」

つと携帯を取り出す！

おおーなるほどー。その手があつた！… つて女の手とメアド交換！？願つてもない」とだが…少し緊張するな…

「なるほどですねー！つて何でおれがアキバな人になるんですか！！！否定はしませんが…」

そこは気になつた

「んー…長年の勘つてやつかなー…つかひろくんさー普通にアキバにーるじやん…」

あ、そつか。納得。

すると彼女は小声になり続ける

「…後ゆーちゃん達見る時の顔がねーなんかそれっぽいよ…？」

おおおー…気づかれてたか…じ、自重せねば…

「え…、何の」とつすかー？あはははは…

笑つて「まかす事にした…

「あのー拙者のことわすれてないでいざるか…？」

……おれでた……！

「『』『』めこーなおじー……で、なあとせびいの高校なんだー…？」

ちよつとかわこわつなのぞいつ流してきへりと思ふくなつたのでホツ
とする…

そして意氣揚々と話しだす

「拙者せ…」

「あつ……！」

その瞬間小早川さんが……なあとをいじめてる訳じやないよな…
「『』めんね坂上くん！お姉ちゃん！お買い物しないと……！」

買い物？確かにそんなこと言つてたな…

「あつ…すつかり忘れてた……い、いま何時……？、6時過ぎてる
……せひ帰らないと……お父さん待つてる……！」

6時……！？俺も時計を見ると確かに6時すぎてる……せへえ……母
さん〇〇される……

「ちよつ！俺も帰らないと……めんなおじー……また今度な？ほり、メ
アドも交換しよな？」

赤外線でとつあえず俺のを送つておへ

そして俺たちは流して店を出た…

「グッバイ またきてね」

電車に乗ったと呼吸を乱していた…

「ハア…ハア…とつあえず聞こましたね…」

「ハア…つるホントによかつた…」「逃すと7時にならじだつたよ…」

あの後俺たちは急いで駅に向かつた

なおとは家が秋葉原に近い所にあるやつなので途中で別れたのだ…羨ましいな…

「いやー今日は私の都合で顔をつきあわせて」「めんね。」

泉先輩が謝る

「いや、そんな…」「おひがひおひがひ…」「うううになつました!」

「いーのいーの。ひろくはゆーちゃん達の命の恩人なんだし…」

やつにやれるとちよつと恥ずかしいな…

「うん…やつだよー今日はホントにあつがとつー…」

小早川さん…

…謙遜しても仕方ないよな…

そう思つたので俺も笑顔でこいつ返した
「どういたしまして…」

電車が徐々にゆっくりになる

次の駅についたよつだ…

「あつ、私たちここで乗り換えたから。後でメールするね…ひろくんもみなみちゃんも今日はホントにありがと…それじゃ、またねー！」

「ひろくん、みなみちゃん今日はありがと…ひろくんはまた会えるといいね！みなみちゃんはまた明日…バイバイ！」

手をふる二人…

一人ともお別れだ…なんかちょっと寂しい…

「それじゃーまたー！」

「さよなら…ゆたか、また明日…」

こいつも手をふる

二人の姿が扉で見えなくなる…ガタン…電車がうづきだした。彼女達を残し、電車は次の駅に向かおつとしていった…

フウ……俺はもうちょい先だ

い、岩崎さんと一人きりか……

喋らない……

何か話題を……

……くつーじつい時に氣のきいたことができないから俺はもてない
んだよ……！

……緊張するな……

「今日はありがとうございました！」

「へっ？あ、ああ……うん、ビックリしましたー！」

急に喋りかけられ少し驚く……

「所で腕は大丈夫ッスか？結構強く握られてたみたいだけど……」

「氣になっていたが言うタイミングがわからなかつた……ホントは最初

にあつた時から言つべきだつたんだらうなび…やつぱまうつこひーじ
なんだるな…気遣いつて。

「えつ…あつ…私は大丈夫…」

岩崎さんはそつぱひなび…

やつぱ心配だな

店にいるときからちよくちよく押さえたし…

んつーちよつと次の駅についたな…よしー

「ちよつと待つて」

「えつ？」

俺は降りてトイレに走る
別にしたかつたわけではない
…あつたあつた。

俺はハンカチを取り出して蛇口の水でそれを濡らす。
よく絞つて…OK!

つと急いで戻らないと…

電車に戻ると岩崎さんは心配をつけていた

「ハア…ハア…」めんじめん…これ、よかつたら使つてよ。あつ、

「汚へはなこよ？」

坂崎さんは少し驚いたような素振りを見せ、クスッと笑い、それを受け取る。

「あつがとつ。ひりくん…

…つーせつぱりかなわない…

いつわせーと笑つて返した

坂崎さんは袖をめくつ患部にハンカチを当てる

やつぱりかよつと赤くなつてゐるな…

俺がうじうじしなければ…！

するといつわせーまたクスリと笑つ

「…へじした？」

「懐かしいな…私がゆたかと初めて会つた時に少し似てる…。あつと今日の出合いは特別な出合いなんだ…あ、私降りないと…」

「いつわせー坂崎さんが降つる駅についたよつ

俺は坂崎さんが言つてこることがよくわからなかつたが、そつか…

と一言だけ言つておいた…

「ひりくん」

若崎さんが手を差し出す。

あ、握手……！？

一度手を背にまわしてよくふってから俺も手を出す…

うわあ……や、柔らかいな…女の子と握手なんて…何年ぶりだ！？

「今日はホントにありがと…まだどこかで…」

「つすー…じゃあまた！」

若崎さんは振り向き電車から出していく

扉がしまる…俺は一人になる。

今日はいつたいどれだけ「ありがとう」と言われただ…何か不思議な日だったな…こんな出会いは初めてだ。さつと若崎さんが言つてた「特別な出会い」ってやつなんだる…時間は遅くなつたが悪くない気分だ…つん。悪くないな…

俺をのせて電車はまた次の駅に向かっていく。

家

「ハアーいい湯だつた」

あの後帰宅した俺はこつてりと絞られた…
どうにか夕飯までには間に合つたのだが…まあ結構修羅場だつた。
危うく秋葉原禁止令ができるところだつた…

「フウ…今日は疲れたからもうねるか…んつ？」

携帯を見る
「Eメール 4件」

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し（前書き）

今まで俺は逃げ続けた人生を送つてきた……とまでは言わないが確かに俺は逃げた

なぜ頑張れなかつたのか……そう後悔した……いや、してる。悔しいから……悔しかつたから……俺はもう逃げない

苦しいことや辛いこと……生きていく上で避けることの出来ない大きな壁……なんとしても乗り越えてみせる!
証明してやるんだ……

俺は……

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し

あれから3日間たつた……

泉先輩とはネットで会つてゐるのだが小早川さんや坂崎さんからは何の音沙汰もなしだ

…今日は土曜日か…

朝起きた時には両親は既にいなかつた

やつ言えれば昨日の夜妹の試合があるつて言つたな…

暇だな…

じゅんか上条（クラスの友達）でも誘つてあの場所にでもこいつかな…

「へー」

おっ、電話だ

どれどれ…

「坂上なおと」

……フウ、珍しいな…何か嫌な予感がしないこともない…

「…はい、柏木です」

『あ……アーチキ……助けてください……早く……うう……お願ひします……〇〇町まで早く……ちょつ……一……ブツツ、ツーツーツー』

「なあとー? もしもしー?」

な……何が起こったんだ……ひょっとするとまたあの不良どもが……!?
くつ……許せない……!……あのなあとを普通の喋りかたにやせぬくらいた
怖がらせやがつて……!……よし! 待つてろよ! なあと!……!

俺は急いで朝飯を食べ、急いで歯を磨き、急いで顔を洗い、急いで
髪をそり、急いでコンタクトをつけ、急いで髪を濡らし、急いで乾
かして、急いでワックスをつけ、急いで新聞をチェックし、急いで
ファイギュアを眺め、急いでアニソンを1、2曲聴き、急いでドアを
あける! 急いで戻つて、急いでファイギュアをまた眺め、

そして急いで駅に向かうのだった……

20分後 俺は町についた

ハア……ハア……大分遅くなつた……クソツ! 電車め! ちんたら走りやが
つて……!

なあとは……なあとは無事か!……?
〇〇町とは言つてたが……一体どこだ!……?

「」せいわゆる町である

まあ普通にバー・パートもあるしホビーショップとかもあるから、よく
じゅんたちと来たりするのだ…

それより早くなさないとさがれなきゃ……

どうだい？

ゲームセンター？

わからんがどうあえず行ってみよ!」

「ゲームセンターへ

……相変わらずのことでござる

だがそこにはびざれぬ憧れの……じゃなくて、早く探しなこと……

じぱりと捜してみるがなおとの姿は見えなかつた……

「」やがてやがてやがてやがてやがてやがてやがてやがてやがてやがて

別の所を……ん？

ふと見ると「」は格ゲーライナー。

最近あんまりやつてなかつたからな……ちよつとへりやつて「」がかな……

俺は一番得意なやつの所に座る。

そして少しレバーをガチャガチャしてみた…「ん！ 久びさだな… わ… やるか！」

お金を入れるとギャイーン！と効果音がなる。

よし、先ずはアーケードだな… 裏コマンドを入力、と。

このゲームはタイトル画面時に裏コマンドなるコマンドを入れると敵キャラが異常に強くなる仕様になっているのだ

……ピロン！

この効果音がコマンド受け付けの合図だ

OK！ じゃあやるぞ！

最初にキャラ選びだ。俺は気にいってるキャラを使う

OK！ 準備は整った！

相手は誰だ…？

ドギャーン！

フウ、コイツか

カウンターハメでいくかな…

『ラウンド一！ファイト！』

俺は軽快に勝ち進んでいった

ヒヤヒヤられるほど俺は甘くはない！

さあ次の相手は…？

と思った瞬間！

『ニユーチャレンジャー！！』

派手な効果音と共に派手な文字が…

フウ、挑戦者が…いいだろ？…受けてたつ！

相手は…フウ…中々上級者向けのキャラだな…俺と同じ、カウンタータイプだ…！

『ラウンド一！ファイト！』

先ずは様子見…

前進とバックステップを交互に行つ。ここに突っ込んで来た所に力
ウンターをぶちこむ！あいにく俺のキャラは屈K最速！
カウンターボーナスでダメージ二倍！

わあ、どうする…？

すると相手は…飛びじみ…一いつ…しゃがみガード無効か…！
仕方ない！対空！

…なつ…？空中ガード…？クソッ！コマンドガードか…中々硬いな…
俺は感心している場合ではなかつた！
何と相手はコマンドガードからのキャンセルで次の技のモーション
をカット！

ジャンプXを喰らう…！…くつ…先制か！しかも着地屈P連からのキ
ヤンセルコマンド技！

やばい！ゲージの四分の一は喰らつてしまつた…！

俺も負けちゃ おれん！

喰らえ！起き上がりコマンド…
しかしガードされる！

読まれていたか…！

だが甘い！相手のキヤンセルより早くこちらのコマンドを入力！相
手のキヤンセル技を喰らう前にカウンター成功！これで終わると思
うな！ カウンター技をキヤンセルし、コマンド入力！一気に運ば
せてもらつぞ！

俺はコンボでたたみかける！よし！打ち付けダメージ！コンボボ一
ナスでダメージ、一・五倍！

起き上がりくるなーおそれくは俺と同じ方法でくるー俺の「コマンドガード」後に カウンターを狙つてくるー先ず一発目は通常ガードー！そして一発目はコマンドガードで俺がカウンターを決めてやるー！

ーー完全に読まれた！投げかよーーちつ！投げ抜け失敗！最近投げられてばつかな俺…………

あつとーやっぱり今は立場逆転だ！俺が壁際、ダウン中ーさあどうするか…？

よじーこのキャラの性能を存分に生かしてやるー！

先ず起き上がりだ

屈K連打を決める！やつきもやつたがコマンドガードは一発以上の攻撃には効果はない！故に速攻キャンセルを決めなければならない。だが俺の屈Kは全キャラ中最高の速度！一発目を防がれキャンセルをされる前に一発目を打ち込む事ができる！

先ずはそこまでだ！

作戦開始！

起き上がり屈K連打！やはりガードされたか…更に通常ガード、コマンド技でないから削りも出来ない！だがOK！間合を作る事に成功！よし次！俺は壁ジャンめぐり！対空はさすがにしてこないか…だがOK！めぐり成功！

何か最初の作戦と全然違つが…まあいいや

屈Kーガードー投げー投げ掛けからのキャンセルコマンドーコマン

ドガードキャンセル！ガード・ノマンド・ノマンド・

……！

……ハア……ハア……中々やるな……！

お互いういライフは残りわずかだ……
ああ、どうぐる……？

……よく見たらゲージMAX！必殺技行けるな……

これでKO狙うか……

先ずは前進バックステップの連打！
相手を誘つ……！

……飛びこみ！先ずは対空！相手は素の定コマンドガードだ！

これが狙いだ！俺はその対空をキャンセルし、必殺技を打ち込む！
読みが甘かったな！

とどめだ！喰らいな！

フウ……必殺技コマンドを入力し、勝利を確信……のはずだった！

しまった……相手もゲージMAX！……！

何て間抜けなミスだ！

やばい…キャンセルが…来る…！

うわあああ…！

出だし無敵かよおおおおお！

ぐはあああ…！

…………

結果は惨敗…

自信はあつたのに…

…俺を負かしたやつはどんなやつなんだ…？

俺は席をたつて相手側へいつてみた

…まさか…また女性の方…！？

そこには俺との勝負に勝つて得意げに友達に話している子がいた…

「ほりー…勝ったー！」の手のゲームでは負ける気しないんだよなー。

「何よ。 いつもけつこう危なかつたじゃない。」

「勝つたんだからいいじゃん…ん？あつ、もしかしてキミ今の人
？」

なんだよ……俺最近まけっぱだ……どうしたらいといんだよ……へやつーなんで俺が……つておつと……

「えつー…あつーはー…どつま…えと、参りました。完敗です…」

気がつかれてしまった

「んつ? キミも中々強かったよ? でも私にはちょっとかなわなかつたなー。はははは」

俺はちよつとムツとなる

… いじめで罵られるか… 贠けたのは事実なんだが…

それに気付いたのかもう一人のボーイの子が、
「ちよつと… 言こすきじやないの? 恥ずかしいわよ…」

と小声でいじつ… と呼ばれる子に罵つ

少し申し訳なさがつた
「えつー…あ… じめんキミ ちよつと罵こ過ぎたかな…」

「えつー…え、負けたのは事実ですしね…。じゃあこいで失礼しま

すわ……。……あつ………」

急に大きな声を出したので一人が驚く

「しまつたーなおとーすいません、この辺でえつと…身長は俺くらいで金髪、で中々イケメン…で、ちょっとかわいい感じの男見ませんでした? 服装はたぶん…ボーダーライン入った感じのシャツ来てると思つたですが…!」

俺は慌てて一人にきいてみる

「くそ。ちよつとかわいい感じの男子ね…キミと仲っこいの?..」

「うわんとやらがきこてきた。聞いてるのせりつちなんだが…まあいいや…仲がいいかどつかは知らんが慕つてくれてるしな…

「ええと…まあまあです。見ませんでしたかー?..」

「ひょっとしてそのイケメン君とは付き合つたりする?..」

…?

「…せー?..」

「ねえとーー!」

「冗談冗談！……つ～ん見てないねえ」

何を言い出すんだこの人……つと…早く捜しにいかないと…

「わ～ですか…どうもですー…じゃこれでー！」

「う～す」

俺はよくわからん人と別れてゲームセンターを後にする…

……………ハア…ハア…なあと…ホントにビックリいるんだ…！？

何で携帯通じないんだ…？

一
体
…
！
！
！

そうだよ！簡単なはなしだ！

ホビー・ショッピングに行けばいいんだ！！

あいつの行きそうな所考えたらそこしかない！！

俺は急いで向かう…

とあるシッピ

おお久びさに来たなー！

「こはまだ俺がオタクとして目覚め毛のはえたくらいの時にじゅん連れてよく来てたなー。

つと感傷に浸つてゐる場合じゃ ない！
つてかこにホントにいるのかー？

店の中でもめ事起こしたら警察呼ばれるだろ？

そんな感じにも見えない…

まあ人にきいてみるか……………んつー？あれば…………！

明らかに挙動不審なやつが…奥に…………！

それは俺に気づくとものす、こスピードで接近してきた！

「アニキ……………来てくれたんすね…………！」

えええええええ！？

お前無事じゃん！
なんだ！？

やばい！突っ込んでくる！

避けるか！？いや、後ろは商品が！

そ、そのくらいはさすがのなあとでもわかつてゐだろ...

……いや、わかつてない！「コレはマジで突っ込んでくる！…

ビリする！？突撃されたらこのスピードだ…殺られる！

ちよつ！…誰か止めりよーおい誰か！…

「そ、うやつてまた他人任せか？逃げんなよ。ひろ…くくく…」

……………

…ええ…まよ…！

俺は一気に踏み込みなおとの腹まで姿勢を落とす！

そして横に素早くズレ、腕をなおとの腹に…！…！

耐えろ！俺の腕！！

グンッ……

「べべえっ……」

……ひつ～

……上める事ができたよつだ

懲へ御づな……なおと

「あ、アーチキ……」

なあとせせぱくぱくなつてる……

……毎回毎回なんだよ……言われなくともわかつてんだよ……ク
ソッ

「つで、何の用があつて呼んだんだ？」

なおとを聞いて詰める

「……すいません……ちょっとだけお金を貸していただこうと……なんて思つたりして……あははは……」

フウ……全く……

「じゃあ向であんな訳のわからん電話したんだ……？普通にすればよかつたるひ……」

「ホントにすいません……普通にしたんじゃ来てくれないかと思つて……」

……

「バカ野郎……俺とはまだ会つたばっかだからまだわかんないかもしないが、少なくともなおとは俺のことを慕つてくれてんだ。そんな奴を見捨てたりするほど俺は冷たくはないよ。」

……恥ずかしいが、まあ……本音だな……

……

「例えそれが創りものだとしてもですか……？」

？

「すまん……今何て？」

「俺はてっきりアーニキーーとか言ってまた抱きついてくれと願ったの
だが……

創りもの……？

「いえ……何でもないです！とにかく来ててくれてありがとうございます！お陰でこのグッズが買えましたあー！感謝ですー・アーニキー大好き
！！！」

？

「あ、ああ……よかつたなー買えて……」

？？？？？？？

「どうしました…？」

心配そうなおと

『氣のせいだったのかな…？』

「いや、何でもないよ…。それよりお前にこのもがかったのか？」

なおどが買ったものは美少女系のキャラがたくさん出てくるアニメのグッズだった

てつせり「マイツは戦隊ヒーローものが好きだと懸っていたんだが…

「はー！大好きですよーー見てくださいこのシャインテー・シンテレン萌えーですー！」

…………氣にある」とはないか…わざとゲーム疲れたな…わざ…ランシヨン上げてくれか！

「フウ…やつは話なり負けられないな…！…わあー諂ひよひじやあないか…！」

「むーー！私も負けませんよーーー！」

「…して萌え論議が始まった…店の中で…

「だ・か・ら！ 時代は貧○なんだつて！！」

店によからぬ言葉が響く。

声の主は迷惑を惹いていたいよ。

「いやー、アーニー、そこは譲れませんよー、おれは絶対

「バカ野郎！でかいののどこがよい！！考えてみろ！想像するんだ！お前ツンデレ好きだろ！ほらつ！スポーツも出来て成績優秀！いつもは強気な委員長！！しかし彼女は胸が小さい！！彼女はそれをきにしてる！！自分はその委員長の彼氏と仮定する！人前ではツンツンされるんだ！そこまではわかるだろ！？そしてイザという時になった時に……」

「ゴクリ…ズバリいざというときは…？」

「フフン……！ それは言わずもがな！ ショータイムだよ！ シャルウ
イーダンスだよ！ 目の前で彼女が身に纏いし聖なる衣を一枚、また
一枚と自らの手で脱いでいくんだ……！ そして最後の砦が崩壊したと
き……！ 彼女は顔を赤らめ胸を隠し…… こう言つんだ……！

『わ…私、あんまり大きくないから…その…え…と恥ずかしい…』

てなああああ――――――

「うおおおおおお――アーキ――！俺が間違つてました――！時
代はやつぱりは・○・です――。」

あつははははははははもう最後のほつ関係ねえや――！あつははは
ははは――――――

「せうか！わかつてくれたか！俺は嬉しいぞ――――――

ソロで俺たちの友情はより一層深まつたのである……

一つ言おう。ここからはバカだ。

……それから店を出て（店の人達からはすごく冷たい視線で見
られてしまつた……しばらくは行けないな……）一人でプラプラと町を
歩いて俺たちは別れることにした……

「アニキ！ホントにあつがとつす。」

「構わないよ。それより今度から普通に話せよ。敬語とか使わなくていいからさ。」

「えつ、でも…」

「フウ……やっぱり急に喋り方変えるのムズいよな。俺がもつと最初に言つとけばよかつた。」

「気にはすんなよ！俺たち激論したる？対等だよ！対等！それに友達じゃん。敬語なんていらない。なつ？」

「……せいい……じゃなくひつし…わかつたよ！そいつあるね…」

少しだキッとした。コイシ…男のくせにかわいいな…何でオタクなんじやつてんだ…

「おひー…ひじへなー…そんでもつてじやなー…なひとー…」

「うそ、ほひじへー…じやあねー…ひるー…」

そのまま俺たちは笑顔を交わし、わかれていった…

俺は駅から出て家に帰つていく……フウ……肌寒いな……まあ季節が季節
だしな……急いで帰ろ

俺は少し急ぎ足で家に向かつ……

『柏木……ひる……』

…………ん…………?

名前呼ばれたか…………?

俺は振り返つて見ると長い黒髪の少女の後ろ姿を確認できた……

オリーブドラマ

「……あの子かな?」

「…そんな訳ないか…」

今日は何か変な日だつたな…まあいいや明日も休みだ。 テンションあげて!!ーー!!

俺は急ぎ足で家に向かつた。

物語は変わり始める…

欲は抑制しがたし嫉妬は醜し（後書き）

フウ

少し口が過ぎたろ……だから罷を『えてやつたんだ

物語は俺の手によつて左右られる

柏木ひる

氣をつけなよ……？

俺は……嫉妬深い

懐かしきはあの場所（前書き）

俺が全部悪かつた…

俺のせいなんだ…

全部全部…

俺のせいだ…

憧れは醜い嫉妬に変わる…

柏木ひろ…俺がそつちにいつたら先ず最初にお前に謝るよ…

そしてこいつは...な?

懐かしきはあの場所

おはよう、朝ですよ。口羅ですよ。――

今日はいい天気だな

ボカボカ陽気だ：

… こんな日はお外で元気に遊ぶのが一番！――

よし...とこうね玉で今田五郎様を出でて小早川さんと相撲さんを誘
う...。

… 女の子を誘うなど… 緊張… する

ハア……こんな俺にそんな偉業が成し遂げられるのか……？

が、がんがろうーー！
行くぞ！

アアアアアアー！！恥ずかしいー！後はこの電話マークを押すだけなの

に
！
！

「……てめえには無理だ。諦めろ。」

…おせわに登場で。

こんなところで怖じ震いでたまるかー

ピッ！ プルルルルルル！ プルルルルルル！

ああ掛けてしまつた！！もう後には戻れない…

プツ

「もしもし。小早川です。」

「あつ！…つと！…もしもし。柏木です！おはよつー！」

フウ… 噛まずに言えた…

「あつーひらくん!? おはようー久しぶりだねーどうしたの?」

久しぶりなのかな？

「ああ、久しぶりーえ…と…今日は暖…かな…？」

こんなもんじよいだらうか…

「今日…へーーん特に用事はないけど…あー、今みなみわやんがこつつかれてるよー。」

!—!

おおやん… いましたか！！

「え？ おおやん… あいつか… つん！ 小早川さん… 今日、川にいこひー。」

言えたああああ！

「ええー… 川！？」の拳節に川なんかいつたら寒いんじゃ…？」

やつぱつやうだよな。普通やつなるわ… じやんの時やつだつた… だが俺は「ひつひつんだー！」

「ダイジジョブ！川に入るの俺だけだからー。」

フウ…張り切りすぎたかな。

何とか誘うのには成功したがちょっと早く来すぎたかも知れない…

俺は自転車に乗ったまま小早川さんたちを待つ…

しかし、小早川さん達は以外に早く来た…俺の知らない人を一人つ
れて…！！

小早川さん達が挨拶をしてくる

「おはよー。」

「おはよーひらくんー。」

「ああ…お、おはよー。今日はまじめん休みの日なの。」

「全然いいよー。所で…ホントに川に入るの…？」

「もちろんー男に一言はないのをー所で…そちらの一人は…？」

ものすぐ氣になっていたので聞いてみた。

「えっと…紹介するね。留学生のパーティちゃんとクラスメートの田村さん。」

「ハイ デウモテス」

「は、はじめましてスー」

二人に挨拶される

…………？—一人とも見たことがあるな…

「あ、デウモはじめまして柏木です。」

「OHー ナーをいつてるんテスかー?アつてますエー。」

ピーンときた！

「あーあの時のーミク〇せんー?」

「ピンポン！セイカイでース！あのトキはどうもアリガトでス！
パトリシアマー・ティンでスーよひしくネ」

うおう…さすが外人さん…色々ダイナミックだな…すまんなあと…
俺は貧○好きだがコレは無視できん…！…！

「よひしへー……え、とわざひがみ間違つてたらあみせん。昨日あつてますよね……？」

俺はもう一人の女の子に尋ねる。

「…はいーあつてるツス！昨日はすみません…。」

まつ！？

「何で謝られる!?」「何で謝るんすか?」

俺は驚愕の事実を耳にする…

「実は…昨日ずっとつけてました…！」

ま、マジかよ…！？

「実は昨日私あのショップにいたっス…それで公共の場で熱い抱擁を交わしてある柏木くんがいたもん…」

「げつ！」

「まさかちよつとあのワンシーンを見られてるなんて…！運がわるい…！」

「ちよつ…あれば違つ…！あいつが突っ込んでできたから…」

「へはり…一つ、突っ込んで…ひとつとは柏木くんは受け…」

「えつ…？何でそつなる…何故に初対面…かな？の人で…ここまで妄想が広がるんすか…？ちょつ…きいてる…！？」

「つふふふふふ…」

「ひん、ひんなつたひよつんはダレにもトめられません。アキラめてレッシィゴー デス…！」

「えつ…？待つて…えええええ…！」

小早川さんと若崎さんの頭には、がたくせん浮かんでいるのが見え

る.....

そして俺たちはその10分後、出発する事になった（妄想ワールドに入った田村さんを正気に戻すのに時間がかかったのだ…）

…出発して30分経過

「ハア…ハア…ひろくん…あとどのくらい…？」

小早川さんが息を切らしながら聞いてくる。

そうだな…大分走ったから疲れるよな…

「もうちょいかかるんだ。
ソコで休憩しよう！」

「…」

「…」

丁度いつもじゅん達と休む場所に着いたので俺たちは休憩をとることにした…

そこには小さな屋根があり、屋根のしたには背もたれのないすがある。

その近くには小さな川が流れていて休むのにもいいの場所だつた。

もつとも今の季節川に入る人などいない…

俺たちは自転車をとめ各自椅子にすわる。

「うわー。空気がきれいなところだねー。」

小早川さんが深呼吸をする

「だろー?」よく友達とくるんだ。夏はこの川で少し水浴びでくんだけどもう寒くなるからなー。」

「へえー…ひるぐれこいつ好きなの?」

小早川さんが尋ねる

「イエス!大好きさー!」

「おフタリさん!カシショウにヒタるのもいいですが、スワッてお

ベントカラビンショウ 「

おおー・パトリシア わー...

「あ、そりだな…せつかく小早川さん達が作ってくれたからな。食べないと…それにしてもよく「感傷に浸る」とかこいつ言葉知ってるね…」

日本語ペラペラだが一応外国人だよな…

「ハイー・ワタシーポンのマンガやアニメダイスキでしてやいかー！ポンゴマナびましタ！ひろはオタクですね！？」

ああんー！むうー！間違つてないかじ今そつこつ話じやないでしょー！まあいいけど…

「あ、まあね…あはは…や、そんなことよりー！弁当食べよ弁当ー！わあ美味しそうー…！お…マジで美味しそうだな…」

「頑張つてみんなで作つたんだー！男の子だからべからく食べると思つて…お姉ちゃんにも手伝つてもらひつてねー！」

！

「あいや？ 泉先輩いたの？まあいいか…じゃあ頑張つかな！ あつ！ 田村さんも座つて食べよつよー…昨日のひとなんて氣にしてないからさー。」

遠慮がちだったので田村さんを誘う。段々俺もなれてきたかな…？

「う、うん… ありがと。」

まだちゅうじと返すいかな
…?

まあ……その内慣れるだろ……

みんな座つたし、じやあいだきます！――！

ああ……美味かつた……俺は腹いつぱいだ……ちよつと動けないな……

「だ、大丈夫……？」

岩崎わんが心配してくれる。ありがとつ……優しい岩崎わん……

「俺は大丈夫…」んぐり、平氣平氣！ おいしかつたしね！ ごちそさま。」

みんなは一ツコリ笑つて返す。

「お粗末さまでした！」

「「じめん… もうちょい休むからさ… みんなはそこいら辺見てきたい
いよ。あんま遠くは駄目だけど。」

俺がそういうと小早川さんたちは

「じゃあちょっと川の方行つてるね。行こー。みなみちゃんー・パーティ
ちゃんー… 田村さん…？」

… 田村さんは少し様子がおかしい。

「田村さん、大丈夫…？」

小早川さん心配そう。

「へつ？あつ！私も休んでるから3人とも行つてきてー。」

「…じゃあ行つてるね！すぐ戻つてくるからー。」

「フタリだけでへんなことしちゃダメすヨ ？」

「パ、パーティー！」

「パトリシアさんー！」

そう行つて三人は川の方へ…

俺たちは一人きりになる。

「田村さん…？ホントに大丈夫…？調子悪くなつたらいいなよ？」

「どうも元気がない…

「あつ…私は大丈夫ッス…所で…『柏木ひろ』って本名…なのかな…？」

…？

よくわからぬことを聞くな…

「え… そうだけど… 何で…？」

「『『杉浦ひろき』 つて名前の人… 知つてゐる…？』

…？
…！—

「い、いや……知らない。聞いたこともないな……」

「…………知つてんだろ…………？正直になれよ……ひろ……お前は嫉妬深いやつだ……だから俺がいる……今のお前がいられるのは俺のお陰だ……だから俺に感謝しろ！だから俺と代わろうぜ……？俺も…………」

「うひむさーー黙れ！黙ってくれーー！これは俺の人生だ！お前がどんなに嫉妬深くても！どんなに俺が羨ましくても……！俺は俺だ！お前とは代わらない！引っ込んでろ！……！」

「…………くつ……！……！何にも考へてないくせに……！嫌な感情を全部こいつに棄ててるくせに……！……！創られ……」

「黙れええええええ……！」

……ハツ……

「そ、う、ツ、ス、か…じゃあも、し、知らなかつた、と、して、も…もし、そ、の、人、が、話、か、け、て、き、た、ら…う、ん。ち、や、ん、と、話、聞、い、て、あ、げ、て、ね。…あ、つ、！変、な、話、し、て、ご、め、ん、ね？」

「まだ…何、が、言、い、た、い、ん、だ…アイ、ツ、は…？」

「柏木、くん？」

「あ、つ…『ごめん。う、ん、わ、か、つ、た。杉、浦、ひ、ろ、き、だ、ね…覚、え、と、く、よ…』」

「絶、対、つ、ス、よ、ー、?、よ、ろ、じ、く、ー、」

握手を誘われる

「お…またか…！」

「やつぱり、ちょ、つと、緊、張、する、が…せ、つ、か、く、だ…！」

俺は田村さんと握手を交わす…

「…あ、う、ひ、う、う、」

しかし、その握手には違和感があった。

握っている手は確かに田村さんのものなんだが……

田村さんは誰と握手してるんだ……？俺じゃない誰かと握手をしている……そんな錯覚にとらわれるような握手だった……

「ただいまモドつましター……つてアーネナニやつてるんですか！」

！――！

みんな戻ってきたようだ……！

「えっ！？何って……ただの握手よ！？握手！パーティ！」

「ホントですか～？」

ニヤニヤとパトリシアさんが見てくる

はっ！

「小早川さん！岩崎さん！別に変な意味じゃないんだよ！？仲良くしようつて意味で……」

必死に弁解する俺

「わあ！よかつた！一人ともあんまり喋らなかつたからちょっと心配してたんだ…。でも仲良くなれてよかつた！ね、みなみちゃん！」

へ…？

「うん…私もちょっと心配だつた…」

必死に弁解していた俺がバカだつた…そうだ…このふたりはクイーンオブザピュアだつた！心配した俺がバカだつたぜ！

「あ、ああ！よかつたよ！うん…仲良くなれてよかつた！な、田村さん！」

「こ」で田村さんにふる

「えつ私！？お…えと…そうつスね！よかつたツス！よろしく！柏木君たち！よかつたツス！仲良くなれて！…あはは…」

とりあえず笑つて誤魔化すことにな…

小早川さんたちも笑つているが一人だけ…

「ナットクできませン…！」

一人だけ

そうして俺たちはまた川を目指し出発した。

「わー……！きれいなところスよね……！」

「そう！自然もいっぱい！きれいな空気たくさん！！俺はこの場所がだいすぎだ！！」

はい！！噛んだ！！

「はその通りともきれいな所である。」

川も上流だから汚れていないし、木もたくさんある。

オマケに田舎で車も通りないから空氣もきれい…！

静か！

とてもすばらしい場所である！

「うこうう自然がたくさんある所はいつも大切にしたいものである！」

「普段は仲いい友達としか来ないんだ。でも小早川さん達ならいいかな、と思つて…どう…」

「うん！ ありがとう…！ スゴく良…うだね…苦労してきたかいがあつたかも…」

「すく静かで落ち着く場所…私…うつ場所…好きだな…」

「うう…いいアイデアが浮かびそうかも…」

「ふう…いいアイデアが浮かびそうかも…」

「あ…思つたよりも好評でよかつたあ…」

でも最後がちょっと何か…………アイデア…………？

「……え？アイデア？」

田村さんに尋ねてみる

「あ、私末熟ながら同人誌かかせてもらってるツスー・ジャンルはまあそれぞれツス！あはは……」

「田村さんは絵がすげ〜く上手なんだよ〜」

と、小早川さん。

さつきの様子から田村さんの好きそうなジャンルは大体わかる

「へえー……そなんだ…今度是非見せてもらいたいな。」

俺は田村さんにそつこつてみる

「えつ……あ、そうかあ…まだ柏木君はみた事ないからね…つて無理ツス！恥ずかしいツス！！それだけはお許しを〜！！」

ははっ…やつぱつおもじりいな！

俺は思わず笑つてしまつ。
みんなもつりれて笑つ。

何か……………楽しいな。

「つか…じゃあそろそろ行きますかね…—..」

「カンチユウスイロイのハジまりですね—..」

「ホントに大丈夫? ひるぐる…」

小早川さんが心配してゐ

「OK大丈夫…じゃあ行つてくぬ…つてパトロシニアさんまた「寒中水泳」で…ちよつと違つ…」

まあ気にしない…気にしない…

俺はまづシャツを脱がないと…

!!

しまつた！

女の子しかいないのに上半身裸つて……！

は、恥ずかしい！

ぬし、
服きたまま行けり、でも帰りが寒い

ど、どうすればいいんだ？

11

「みんなはなんかまだかなあ」みたいな見てる……！！！

勇気を出すんだ！

てい！

... つら ... 寒い ...

「おおー！中々いい体してるつスね！勉強になるつス！」

田村さん

「まあ、行つてくるーー！」

俺はガーッと走つて川に飛び込む！！

サバーニン！！

「今日は楽しかつたね」

小早川さんが言う。

「やうへ。それはよかつたよ。」

俺はあの後心臓麻痺をおこしそうになつた……

「やつぱつもつたなるなー…あー…たゞば小早川さん！誕生日じゃないか？」

「12月は小早川さんの誕生日がある田じゅんー」

「え…何で私の誕生日ひろくんが知ってるの…?」

「何でつて…え…? 何で知ってるんだ…? 俺…」

「俺が知ってるんだ。お前が知らない訳がないだろ…? へへへ…」

「…!」

「えつと…! ほら、私が教えたの! 誕生日プレゼントとかあるシス

からーね、柏木くん!…!」

田村さんがフォローする。

… そうだったかな?

「あ、ああ…そう言えばそうだったね。田村さんから教えてもらつたんだよー」

「えつ~。やつなの? こよ~プレゼントなんか。ひろくんに悪いし

…」

「いやこや、誕生日プレゼントは形で表現するのが難しい友情の表現の一つ…遠慮なんかしなくていいんだよ?」

「これは俺論の一つである。

「え…友情…」

小早川さんが少し寂しそうである…
何か変なこと言つたか…?

「ハア…ひろはオトメゴロロトヤツがわかつてませんネー…」

は? オトメゴロロ…?

「ちょっと一パーティちゃん!」

小早川さんが顔を赤らめて囁く。

「OH! ソーリー ゆたか！」

「えっ……」めん…。そのオトメガコロがわかつてなくて… 所でオトメガコロつひ…何?」

「「え…?」」

俺は相当鈍いようだ…

「じゅあまた今度！」

「じゅあ…」

「グッバイひる…ひよりん…!」

俺は三人とここで別れる。

「じゃあまた！今日の所は忘れないでねーーー！」

「また明日ーーー！」

…田村さんが話があると言つたので俺は残ることになった。

「…で話つて？」

あまり触れなかつたが今日はよくわからないうことがたくさんあつた。

田村さんという人は世間的に言えれば不思議ちゃん、なんだろう…田村さんには悪いが…

「実は杉浦くん…あ、ごめん、柏木くん…私と柏木くんは何回もあつてるんスよ…」

…？

また「杉浦」か…

「…どいつこいつ」と…

意味がわつぱりわからない…何故俺を杉浦とかいうヤツと間違える…？

俺は田村さんと面と向かつて話すのは今日が初めてだ

「ホントにわからない！？私は昔から結構あつてるんだよ！！私が同人誌描いてるってことも知ってるよね！？やつと杉浦くんがどんな顔やどんな恰好してるかわかったのに…ねえ杉浦くん！思いだしてよ！…」

…つ！…また杉浦か…

わからないわからないわからない…！…

「『めん田村さん、少し言葉がきつくなるかもしねないけど単刀直入にいうよ。俺は杉浦じゃない。柏木だ。杉浦なんてやつは友達にもいないんだ。それに顔がわかつたってどういうこと…？田村さんは顔も知らないやつと話をしてたのか？僕がその杉浦ってやつだつていう保証は？』

僕：？

「…あ、『ごめんなさい…ちょっと熱くなつたツス…でも杉浦くんは言つたよ…もうちょっとで会つて直接はなせるつて…今度は面と面向かつてネタの話とかも出来るつて…私…男子とはリアルでんまり話とかしたことなかつたつスから…住む次元とか違つてもおんなじ『創る』側の立場だつたから…ちょっと嬉しかつただけ…』

創る…？

また創る…

創るってなんだ?
創造するってこと……?

誰を……?

俺……?

俺は創られた……?
そんな……

俺を作ったのは父ちゃんと母さんだ……

「違う……そんなことがあるわけないんだ……あつてたまるかよ……俺だ……」

「違う……そんなことがあるわけないんだ……あつてたまるかよ……俺は柏木だ……柏木ひろだ！杉浦じゃない！！創られただと！？はははははははははは！ふざけるなよ！じゃあなんだ？俺が今まで歩んできた人生はお前が創ってきたってのか？俺がオタクになるのもお前が決めたのか！？俺がお前ならそうはしないな！もつとかつこいい趣味を選んでもっとかっこいい容姿、にしてるよ……べつに今の自分に不満があるわけじゃないけどな……！」

「…こんなヤツに負けてたまるかよ…

「中々おもしろいことを突いてくるじゃねえか…だが一つ間違つて
る」とがあるな…」

間違いだと…？

「なんだよ…」

「俺が教えるとおもうか…？笑わせんな！」

…意味がわからん…

「柏木くん…？」

…はっ！

「…あ、田村さん…」

「大丈夫っスか？何か急に黙つて…」

「“めん、大丈夫…」

…また飛んでたな…

俺は身体中から嫌な汗が出ているのを感じた…

一体この田村ひよりという人物は俺の何を知ってるんだ？

ひょっとしてこの人は知ってるのか…？

「俺の中」、を…

「田村さん、もう一回聞くよ？俺のことを「杉浦」だつて思つのは何故なんだ？」

俺は真剣に田村さんに尋ねる。そこに答えがあるのかも…

「…柏木くんは杉浦くんと似てる所があるっス。例えば柏木くんは川や自然が好きだよね？杉浦くんもそうだったんだよね…いつもそ

んな話を嬉しそうにしてた…あ、いつからも質問していいかな…？」

杉浦は自然が好き…？確かに俺は自然が大好きだ…でもそんな…偶然だつてある…

「ん、ああ。いいよ」

「柏木くんは格闘技とか好き？あと何か武道を頑つてたとか…」

!!!!!!

まさか…初めて会つ人にここまで的を得た質問をされるなんて…!!

「うん…格闘技は好きだな…見るのも好きだしやつてみたいと思う。あ、僕はつい最近までは剣道やつてたんだ。あんまり強くはなかつたけどね…」

僕は実際かなり弱い部類じやなかつただろうか…試合でもあまり勝つた記憶がない…orz

そう聞いた田村さんはものすごく驚いていた…

「やっぱり！… 杉浦くんも剣道やつてたつて言つてたツス！… 私はあんまりわからないけど… 格闘技とか好きつて言つてよく話してくれたツス！」

杉浦…ひろき… 一体…僕は別に小さい頃の記憶がないわけじゃない。むしろ鮮明に覚えているくらいだ…！だから僕は杉浦じゃないんだ

…！

「そ、そこまで僕にそつくりな人がいるのか…驚いたな…。」

きつとこれは偶然だ… 偶然だよ…！…！

「それで極めつけはこれ…柏木くんは小早川さんの誕生日を知つてた…！」

…！
どうするよ…！

こればかりは何もわからない…！…！

「…………… 田村さん、これはどういふことなんだろ… 何で僕が小早

川さんの誕生日を……？

もう頭がクラクラする…

「杉浦くんは私たちの誕生日を知ってるっス…きっと柏木くんは私の誕生日も知ってるんじゃないかな…」

僕がそんなの知ってるわけ…

「5月…24…」

「正解…。わかったかな…私が柏木くんを杉浦くんだと思った理由。

」

……僕は柏木じゃないのか…？だとしたら田村さんは残酷だなあ…
僕という人間を否定して僕が杉浦だなんて…

これは夢か…？

一体杉浦って誰なんだ…？

……杉浦って誰だよ！？

一番大事な事をきいてない！？！

「田村さんー最後に聞くよ！？杉浦って誰だ！？さつき言つたよね？顔がわかつたって！？田村さんは実際に杉浦にあつた訳じゃないのかー？何でその杉浦は田村さん達の誕生日なんか知つてるんだ？教えてくれー杉浦ってやつは一体どこのどいつなんだ！？」

そう言つと彼女はスゴく困惑してしばらく黙つていた…

僕も黙つて目で訴える…これだけは知らないといけない。

僕の中には「このヤツにギヤフンと言わせてやるんだー！」

「…………」

……………！？

「…………柏木ひる…………やつとひめ前に干渉出来た…………」

「誰だー…？お前なのが…！？」

「わの少…もつ少しなんだ…」

「おこ…こつもの元氣がないぞ…へどうしたんだー…？」

…………返事はもつなかつた…………

「柏木くん」

やつやく田村わんが口を開いた。

「私が知っていることの全部をはなすね……きっと信じてもうらえないかも知れないけど……私の事をおかしい人だと思つかも知れないけど……」

フウ……全く……

「僕はそんなこと気にしないよ。杉浦ってヤツはその話を聞いて田村さんをおかしいと思うようなヤツじゃないだろ？僕がその杉浦つてやつなら僕はそつは思わないな！田村さんの話を信じるよー！」

自分でも全く何を言つてゐるのかわからないが、杉浦ってヤツは間違いないなく田村さんの事をおかしいと思わないだろ？
それは僕が田村さんをおかしいと思わないことと等しい。

今……たつた今……繋がつた……嫉妬が消えたんだ……今初めて感じた……

あいつの存在を……！

「ありがと……じゃあちよつと長くなるかも知れないけど頑張つて
きてねー！」

「どんとこーーー。」

俺は真実を受け入れる！

懐かしきはあの場所（後書き）

ついに柏木ひろが真実を…か…。

つまんねえな…

何にも知らないあいつが困惑するのを見るのが楽しかったのにな…

柏木ひろは田覚めていってゐ…

あいつという一人の人間として…

まあ…この謎が解けたらまた楽しい日常が送れたらいいな…

まあ…俺がいる限りそれはないがな…

たかが嫉妬は物語を変える
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060o/>

Lucky staR～俺の人生を変えた物語～

2011年10月8日01時09分発行